

二

日本の空港の夜の発着には、滑走路に青や赤・白の滑走路灯や末端灯が、芝生のなかできれいに瞬いてるのに、バンコックでもまたこのカルカッタでも、むかしよく土木工事に使ったカンテラが焰々と煙をたてて燃えながら一定の間隔に置かれていたのが妙に珍しい感じがし、何度も何度も暗い空港をふり返り見ながらゲートの前まで来ると、出迎えてくれた一団はインド大菩提会の幹部の人々で、理事長のソフト博士は洋服のスポンをはいてチョッキみたいな上着を着ているが、Yシャツがその下から垂れさがって、失礼ながら越中ふんどしが出ているのかと思った。

また事務局長のヴァリシンハ氏は、インド民俗服・白いドウテイをびらびら翻しながら案内される。何もかも珍しくて、あまり明るくない迎賓室の電灯の下で親しげに握手しながら、その握手した手まで珍しいような気分で見ている始末。

一行が室に入ってくる順に、ハワイでレイという首にかける花の輪、ああいうものをひとりひとりかけてくれる。黄色い菊のようなゴールドメリケエとかいう花を連ねたものをひとつ、次に白いジャスマインのものをひとつ、二種類の花の輪なのである。かけられたとたんにジャスマインはいい匂いをぶんぶん撒きちらし、主客の名刺交換の間にちょっとした雰囲気をも出し出していた。

ヴァリシンハ事務局長は、私ども日本の大学のことに詳しくいらしくて、「大正大学ではあなたひとりですか」といって、まだ何かいったが、そのあとの言葉は判らない。判らない部分にはっこり笑ってごまかしておいた。これがごまかしの第一号で、おいおいごまかし術も上達するのである。

この貴賓室へ迎えられたために、あちらの入国手続き、税関みな手厚い取り扱いで簡単にすみ、まだ順を待ちながら所持品検査を受けている他国の旅行者のうしろを通り、はだしてカバンなど運んでくれる

ボーイさんに従って空港前に一列に並んで待つていた古い汚いハイヤーに順次乗りこんで、一路カルカッタ市街の方へ向かう。

われわれ四人の乗った車の運転手君は、白いターバンを頭に巻いて、ゆたかな美髯をたくわえた颯爽たる君で、老木の街路樹、はだか電球で夜店のようなものが出ている街路を走りに走ってくれるが、扉はガタガタきしむし窓ガラスは鳴る。そして停車している時には、天井の方でコオロギが淋しげに鳴き出す。初めは「車外で松虫が鳴いているね」なんていつていたのが自分の車の屋根だとわかると、みんなこの腐ったような車に一抹の詩情？ みたいなものを感じたようであった。

とにかくこのコオロギの伴奏つき自動車だんだんカルカッタ市の中心部に近づくと両側は戦後のバラックみたいな古トタン張り、天幕張りの夜店、煌々と傘のないはだか電球の明るい町を大きなバスがゆく、二頭だての牛車、自動車、リntax、自転車、古代から現代までの交通機関が一緒くたに行き交う。はだしの青年男女が溢れるように灯の下を歩きまたは付んでいる。映画の広告、青赤の交通信号、同乗の老先生は満州みたいだという。私は活気があるという。——お世辞ではありません、全く。

快速二十五分？ 街の中心にあるスペンセス・ホテルに着く。ロビーで部屋の割あてを待つ。天井には大きな扇風機が廻っている。が、部屋は足りなくて私ども三人が、少し離れたグレイトイースタン・ホテルというおそろしく天井の高い大理石づくりの古ホテルの一室にはみ出すことになった。九時三十分ぐらいの時間であったが、また一時間半戻しの時差をやっているから、身体の方は丑三つ時を過ぎるぐらいの疲れぐあいである。入浴してさて寝るとなると毛布が一客分足りない。勇気を出して同行が電話で「ワン毛布」と注文するが、いっこう持つてくる気配がない。

三人よると文殊の智慧でハット気がついた。毛布というのは「英語じゃないッ」とね。そこで大カバンを開けて和英辞典なるものを取り出し、おもむろに調べると判った。本当に毛布にありついたので、食うものも食わず飲むものも飲まずに寝てしまふ。

(つづく)

〔仏教書道〕、昭和四十一年